

【巻頭言】

学友会の原点

会長 神澤 良明(43 回生)



学友諸兄に会長に選んでいただき 4 年が過ぎ、再度 2015 京都総会で選出いただき三期目を迎えることになりました。到らぬ事ばかりで、早く次の優秀な方にバトンを引き継ぎたい思いですが、選んでいただいたからには、あと 2 年間、精一杯全力で務めますのでご理解ご協力をお願い致します。

さて、学友会活動の中で、この学友会の歴史の重みを感じている。それは支部組織があること、数多くの優秀な人材を輩出していることなどが挙げられ、その背景には継続があると思っている。ここで少し母校と学友会の歴史を振りかえってみたい。

レントゲン技術講習所から変遷を重ね京都医療科学大学に到るまで、建学の精神「本所はレントゲン学に関する技術を教授するとともに、品性を陶冶し有為の技術者を養成するを以て目的とする」は綿々と受け継がれている。

私は中でも「品性を陶冶し、有為の技術者を養成」の一節に伝統の原点を感じる。母校は単にレントゲン技術者を養成したのではなく、品格ある医療人を育て世に送り出して来た。それが認められた結果として、母校の名声に繋がったものだと信じている。学友会は初回入学式から 3 ヶ月で設立されているのも驚きである。

学友会の設立を島津学園七十年史(平成 10 年 3 月発行)・島津学園 85 年史(平成 24 年 9 月発行)を引用して設立当時の先輩諸兄の気概を振りかえりたい。

◎ 学友会の設立と学友会雑誌の発行

学友会は、「会員相互に親睦並びに誘掖を計り斯界の発展を期せん」との目的をもって昭和 3 年 1 月に計画され、会則を制定するなどして講習所所長福田雋一を会長、主事長坂亀三郎を副会長に選び 3 月中旬に設立された。この学友会の設立は、全国各地より集まり、6 ヶ月間共に勉強し辛苦し親密になったに拘わらず、卒業してただ漠然と別れることなく、卒業後もますます親交を続け、相互の動静を知り、互いに研究の発表を知り合う機関を設けようとの第一回卒業生みんなの熱意によるものであり、会の構成は、生徒数の少ない学校であるが故に、卒業生だけではなく、在生も一緒になった会とし、職員も共に会の活動に参加して家庭的な雰囲気をいつまでも保って行こうとの福田所長の主張によるものであった。そのため会名も同窓会ではなく学友会とした。

また、学友会会則の第四条には、「本会の目的を達する為に雑誌を発行し、且機宜の事業を行う」とあり、その条項に従って、昭和 3 年 7 月に、学友会雑誌という名称で第 1 号が島津レントゲン技術講習所学友会から発行された。以上のように記載されている。

学友会雑誌が発行された当時は雑誌で研究発表もされており、日本放射線技術学会史にも「レントゲン技術専修学校学友雑誌」の文言が登場する。昭和 17 年に日本放射線技術学会が創立されるが、それ以前から同窓生は学友雑誌を通してお互いに研究・情報交換をしていたことが察せられる。尚、レントゲン技術専修学校 元校長滝内政治郎先生は日本放射線技術学会創立・日本エックス線技師会設立・診療エックス線技師法制定に深く寄与されたことを付け加える。

上記の通り学友会設立時の目的は「会員相互に親睦並びに誘掖を計り斯界の発展を期せん」とあり、親睦と斯界の発展が大きな目的であり、斯界の発展には相互の勉強が欠かせない。故に学友雑誌を勉強の場にあてたのだと感じられる。

近頃の学友会活動を見ていると、学友会で勉強を、と言った機運が希薄になってきているように感じる。学友会は情報交換と懇親の場と感じている会員が多数ではないか。これは他に勉強会も発表する場も沢山あることに依るものであり、同窓生が勉強を忘れた訳では決してない。また、酒を酌み交わす場を作ることも非常に大切な学友会の役割だと感じている。

平成 27 年 2 月に兵庫支部総会を開催した時のことである。兵庫支部会員、来賓の中に MRI の専門家が多数いた。その時、若い会員から MRI の専門家がこんなに集まるなら、勉強会を開催して欲しいとの声が上がった。素晴らしい声が上がったものだ、彼らの要望は快諾され、早速 7 月の大阪支部総会では近畿全域に声を掛け、勉強の場を作ってくれるようだ。同時に懇親会も開催され、相当賑やかな大阪支部総会になるものと思われる。これからの近畿地方の活動を見守って欲しいと思うと同時に、全国の支部からの参加を募り、情報を共有してこの輪を可能な範囲で広げてもらいたい。

これからの支部の動きを楽しみに、若い会員の活躍を期待したい。

以上